

アブラハム・リンカンの信仰

——苦悩と悲慘の間で（Ⅲ）——

鈴 木 有 郷

Ⅰ 「奴隷解放宣言」の意図と一般市民の反応

一八六三年一月一日に發布された「最終奴隷解放宣言」が、表面的には何とも奇妙な感じのものであったことは否定できない。その理由は、次の条文に明らかである。

一八六三年一月一日を期し、合衆国に対し、反乱状態にある州又は州の一部に於て奴隷として保持せられたる者はすべて、自今、永久に自由にされる。（傍点鈴木。Ⅲ、86）

連邦に属する周辺諸州の奴隷制度はそのままにしておきながら、反乱諸州の奴隷だけを解放するという宣言に対して抱いた一般市民の戸惑いは、「ニューヨーク・ヘラルド」の社説に如実に象徴されている。

宣言書は法令自体が実施可能な地域 of 奴隷制度については手を触れず、実施不可能な地域内の奴隷だけを解放しようとするものである。基本的人権の擁護者たちは、この差別待遇をどう解釈したらいいのか、たゞ戸惑うばかりである。⁽¹⁾

解放宣言布告後、保守派の人々は、ますますリンカンを奴隷の即時解放を主張する過激派の首謀者とみなしたし、革新派は革新派で彼を奴隷制撤廃は口先だけで、実は世論の動きを見るに汲々とする偽善者として烈しく糾弾した。一方、与党である共和党には、戦争の目的を連邦維持一本に絞るべきであつて、奴隷解放をその目的として掲げたのは間違ひであつた、という意見が強まりつつあつた。このような困難な状況の中で、リンカンは、奴隷解放に対する彼自身の姿勢をますます強固なものにしていったのである。「私は歩くのは遅いが、決して後戻りはしない。」⁽²⁾ という言葉は、彼の決心の程を物語っている。

しかし、リンカン自身、奴隷解放宣言の布告が、味方の中からも強い反発と批判を巻き起していることを十分承知していた。友人との会話の中で、自分自身を巨大な鯨にやっともりを一本打ち込んだ捕鯨船の船長になぞらえたのもこの頃である。「これからは、舵の取り方が大切だ。うっかりすると、しっぽの一撃で粉みじんにされてしまふ」⁽³⁾ 解放宣言に対する世論の反応は千差万別であるから、忍耐強く、確実な道を一步一步歩んで行かねばならない、というのである。

リンカンの意味する「確実な道」とはいかなるものであつたか。そのことを理解するために、まず彼が解放宣言の中で反乱諸州のみを対象にした奴隷解放は「軍事的必要性に応じて (E. 8)」なされたものである、としていることに注目したい。それは、合衆国憲法が大統領に賦与した権限の合憲の行使である、と彼は主張する。即ち、戦争という非常時に於て、最高司令官である大統領は、敵、味方の区別なしに私有財産を没収することができる。

奴隸こそ、私有財産の最たるものではないか、と言うのである。奴隸制を維持している周辺諸州を敵に回すことは是非とも避けねばならないという、当時の緊迫した状況と取り組んでいたリンカンにとって、反乱諸州の財産没収という軍事的名目なしで奴隸制撤廃に踏み切ることとは不可能なことであつたのである。

八月に入ってから、リンカンは野党に向けて声明書を發表し、解放宣言を支持してくれるよう彼等の説得に努めている。

奴隸は私有財産である。戦時立法によつて、大統領が敵、味方の区別なく、財産を必要に応じて没収できるところに異論をはさむ余地はない。(W, 406)

リンカンは、当時既に黒人の志願兵をつのり、黒人だけの守備隊の編成を發表していたが、それへの一般の風当りは予想以上に強いものがあつた。野党である民主党への声明書でリンカンは次のように彼の政策を弁護した。黒人兵は勇敢に戦っている。彼等の活躍が南に大きな衝撃を与えていることは、戦闘にたずさわっている指揮官の報告にも明らかである。黒人を兵士として使役することの正当性は、そのような戦地からの報告によつて十分証明されているではないか。

ここで、リンカンがこの声明書を、北にとつて最も困難な問題は、なんといってもその人種主義に他ならない、という認識の下に書いていることに注意する必要がある。解放宣言發布の後、イリノイ州では六カ月の間に、脱走兵が二千人を越えたという報告を彼は受けていたし、「ニュー・ワールド」や「ニュー・ヨーク・ヘラルド」といった民主党系の新聞が、解放宣言そのものを、「黒い肌の野蛮人の群れ」を北にわざわざ移動させる「愚かで邪惡な行為」^③として批判の火をあおっていることも知っていた。解放宣言を撤回し、戦争の目的を連邦維持一本に絞れと

いう声は、与党野党を問わず日に日にその勢いを増していたのである。「前面の敵よりも、国にとって危険なのは後方の敵である。」という彼の言葉は、その頃の彼の心境を率直に吐露したものと見えよう。

白人優越主義にこり固まった北の人々のことを考える時、リンカンが暗たんたる気持ちにならざるをえなかった。現にこの声明書の中で、彼等に言及する時、彼の口調は突如として烈しい、そして皮肉な口調を帯びるのである。

あなたがたは、黒人を解放するための戦いはいやだと言う。黒人達の多くは、あなたがたのために戦うことをいさぎよしとしているようであるが、そのことは言うまい。黒人のために戦うのがいやなら、連邦維持のために戦え。(W, 409)

連邦に今最も必要とされていることは、われわれ白人の間にはびこる白人優越主義を凝視し、それと取り組むことなのだ。その努力を惜しむことは、いつの日か、自由人こそ実は自由を阻む存在であったという皮肉な結果をもたらすことになりかねない、とリンカンは言いたかったのである。

平和は、ひと頃ほどのように遠いものとは思われなくなった。それはやがて訪れ、訪れたら去ることはないようにしたいものである。そして、その訪れ方たるや、永遠の未来にわたってまでも維持するにふさわしいものであってほしいと願う。その時こそ、自由な人間の間にあっては、銃弾を投票に持ち変えよと主張する訴えに成功の見込みはなくなるのである。その時こそ、このような訴えをする者は必ずや審きを受け、その代償を払わねばならなくなる。そして、その時こそ、黒人達の間には、舌をつぐみ、歯を食いしばり、目をらんらんと光らせ、銃剣を固く握り、自分達が人類のためにこの大なる完成に力を添えたことを思い出す人々がいるこ

とであらう。たゞその間にも、白人のなかには、邪悪な心と偽りの舌をもって、この偉業を阻止しようとした自分を忘れることのできない人達が出てくるのではなからうか、と私は憂うのである。(W. 409-10)

とに角、奴隷解放の問題を解決に導くためには、現存の奴隷制に一撃を加える必要がある。しかし、その方法は、現在の状況の中で実行可能なリアリスティックなものでなければならぬ。現実になつた実際の攻撃を展開しながら、一方では、己が心の中に潜む人種主義を見つめ、その克服に努めること——これこそ、リンカンが意図した〈確実な道〉であつた。

Ⅱ 「悔い改めの日」の布告

南北戦争は既に三年目に入っていたが、戦況に特別な進展はみられなかった。北は第一、第二ブルランの戦いのような大敗を喫することはなかったし、南部の工業力の低下もあって、少しづつ勢いを盛り返してはいたが、戦争終結のめどはいぜんとしてたらず、戦いは泥沼化の一途をたどるばかりであつた。三月には、リンカンは徴兵制を敷いて戦力の大幅な増強を計つたが、それは北の人々の間に政府への反発と厭戦気分を醸り立てることにもなつたのである。

奴隷を解放して神の摂理の器たらんというリンカンの確信は幻想でしかなかったのか。己が人種主義さえも克服できない北の市民にそれを期待することは、愚かなことなのか。このような問いを問い続けた時、リンカンは連邦の人々に対して己が魂を神の前にさらけ出し、神の前に膝を折ろうではないかと訴えざるをえなかった。これが三月三〇日に発布された「悔い改めの日」の制定の意図である(W. 156-6)。その中で彼はまず、すべての国家と国

民が神の統治の下にあることを告白する。「全土を焼き滅ぼすこの悲惨な戦いを、われわれの罪に下された審き以外のものとして考えることは果たしてできるであろうか？」否である。

われわれは天が下のありとあらゆる賜物を与えられてきた。長い年月の間平和と繁栄を受けついできた。人口は増え、富と力は増し加えられた。そのようなことは、かつていかなる国にもないことであった。しかし、われわれは神を忘れた。平和を保ち、民をふやし、豊かにし、強め給う神の慈しみの御手を忘れた。われわれの心を築くう欺瞞は、愚かにも想像した。これらのものはすべてわれわれ自身の知恵と徳によるものである、と。かつてとぎれることのなかった成功に酔いしれ、その結果、神の恵みと贖いの必要性を忘却する程自己過信に陥った。創造主たる神に祈ることはないと思う程傲慢になった！

われわれは、われわれを審き給う神の御前にぬかづき、われわれが犯した国家的罪を告白し、上よりの哀みと赦しを乞ねねばならない。

くり返し指摘したように、リンカンとは、この戦いが北の善と南の悪との葛藤ではなく、北と南の両方の罪が生み出した結果であると考えていた。この確信を「悔い改めの祈り」という形で国民に訴えたところに、苦悩と悲惨の真只中で信仰の人として驚く程の成長を遂げた新しいリンカンの姿がある。

しかし、このようなリンカンの祈りも、一般の市民には空しい試みとしか映らなかった。何故ならば「闘うジョー」と渾名されたジョーゼフ・フッカー將軍の率いる連邦の大軍は、南のリー將軍の側面攻撃を受け、一万八千人の戦死者を残してほうほうの体で退却したからである。五月一日から四日間にあたりくり広げられた悲惨な戦い、「チャンセラーズヴィルの戦い」がそれである。敗け戦を知らせる電報を手にした時のリンカンの狼狽ぶりは見る

に耐えないものがあつた、と友人のノア・ブルックスは回想する。その時のリンカンの姿は「痛々しく、見る影もなく、幽霊を見るようであつた。手を後ろにくんで、部屋を歩き回りながら大統領は言った。『ああなんということだ。国が聞いたならなんと言うだろう？　なんと言うだろう？』」⁷⁾

Ⅲ 「ゲティスバーグの戦い」に於けるリンカンの苦悩と奇立ち

フッカーを打ち破ったリーは、ポトマック河を渡ってメリーランド州へ侵入し、ペンシルヴァニア州に迫る勢いを見せていた。このためフィラデルフィアは避難民であふれ、北全体は大混乱に陥つたのである。しかし、この危機に直面して、リンカンを持ち前の冷静を取り戻していた。それは、六月二日の長老教会の指導者との会見で、「全能なる神の御力にすがりながら、与えられた権限のすべてを行使することにちゅうちょする者ではない(W. 245)」⁸⁾ と言い切っていることからもうかがえる。彼はこの重大な国家的危機に対処するためにフッカー將軍を解任し、かわりにジョージ・ミード將軍をポトマック軍団の司令官に任命してリーを迎え撃つ計画をたてたのである。この南北戦争中最も劇的な「ゲティスバーグの戦い」は、七月一日から四日までの間に、両軍の死者の数が五万をゆうに越すという、当時の戦争の常識を完全に覆す大規模な戦いであつた。

北の陣地を奪うことはできないと判断したリーは、雨の降りしきる七月五日の早朝静かに退却を開始した。それは又、南部連合そのものの後退をも象徴していた。南の経済状態は、北以上に緊迫していたのである。リーの大軍を南に戻らせてはならない。ここでリーを完膚なきまでに打ちのめせば、南部連合に致命的な打撃を与えることができる。そう考えたリンカンは、ミード將軍に追撃続行の命令を下した。しかし、ミードは動こうとはしなかった。そのために、七月一四日には、リーの軍隊は無事ヴァージニア州内に退却した。リンカンの作戦は部下の不服従に

よって失敗に終わったのである。この時のリンカンの苛立ちと怒りはすさまじいものがあつたとノア・ブルックスは記している。ミードは何故戦おうとしないのか。何故最高司令官である自分の命令に服さないのか。それはリンカンの理解を完全に越えるものであつた。勿論、ミード將軍には彼なりの理由があつた。四日間で二万三千の兵士を失いながらとに角北の陣地を死守することに成功したのである。軍人の義務は立派に果たしたのだ。これ以上大統領は何をせよというのか。しかし、このような軍人側の論理は、あと一撃で南を崩壊に導き、このいまわしい戦いに終止符を打つことができた筈であると信じて疑わなかつた政治家リンカンには、臆病者のたわごととしか映らなかつた。あの冷静なリンカンが、この時怒りと苛立ちの権化と化したのである。

彼は、ミードに宛てて長文の書簡を書いている。その内容は、彼がものしたいくかなる書簡よりも烈しく、険しい調子のものであつた。

リーの脱出がいかにわれわれにとって不幸であつたかといふことの重大性を貴官が認識しておられるとは私には到底思えない。リーは貴官の手中にあつたのであり、彼を追いつめていれば、他の最近のわが軍の成功と相俟つて、この戦争を終結せしめえたであらう。……貴官としてはまさに絶好の機会を永久に逸したといふ他なく、私はそのために測り知れない失望を味わっているのである。(W. 328)

リンカンは、しかし、この書簡をしたためたその直後、再び彼特有の冷静を取り戻したようである。彼はその封筒に「送付不要、署名不要」の文字を書き入れ、机の引き出しの奥にしまい込んでいたのである。

リンカンの心を痛めたのは、ミード將軍に象徴される北軍の攻撃精神の欠如だけではなかつた。徴兵忌避を理由に、ニューヨーク、ボストン、ニューワーク、トロイといった東部の大都市で暴動が巻き起こつたのである。特に

ニューヨークの暴動は、良識ある市民の心胆を寒からしめる狂暴なものであった。商店街をめちゃめちゃに破壊し、警官隊と衝突し、市長の官邸に投石した群衆は、あぐくの果てに黒人街に突入し、その孤児院に放火し、数人の黒人を縛り首にして、死体に火をつけるということまでやってのけたのである。暴動は、憎しみと恐怖と五百人以上の死者を残して二日後にやっと鎮圧された。それを記事にした「クリスチャン・リコーダー」の記者は叫んだ。

「ああ、この国は一体どうなってしまうのだろうか？」⁽⁹⁾

IV 「感謝の祈り」から「ゲティスバーグ演説」へ

このような、前方の敵だけではなく、後方の敵とも戦わねばならないという困難な状況の中で、リンカンがともすれば絶望的な気分になられたであろうことは想像に難くない。若き騎兵軍曹 J・L・ストランドリングがその頃リンカンと会見た時に受けた「笑いを知らない、悲しそうで、陰うつな」人という印象は、決して誇張ではなかったに違いない。しかし、リンカンはこの時にも又信じ難い程の忍耐力と強靱な精神力を発揮したのである。当時の彼をその根底から支えたもの——それは愛息ウィリーの死を契機にますます深められていた神へのあくなき信頼、即ち彼自身の個人的信仰であった。それは、十月三日に公にされた「感謝の祈りの推め」の言葉に明らかである。

まず彼は、その年の穀物の収穫が豊富であり、自然の恵みが豊かであったことをあげ、ともすれば神の摂理を忘れがちなわれわれも、このことに思いをはせれば、神への感謝をおぼえずにはいられないではないか、と語りかける。神の恵みの豊かさは、連邦の外交関係にも反映されている。他国の内乱につけ込んでその国を侵略するという国家間の歴史的宿命が、ここではくり返されることなく、諸外国との間に平和が保たれていることは、まことに感謝すべきことである。又北の工業力は強化され、人口は増え、自由は拡張されつつある。「これらはみな罪を審き

給うと共に慈しみをもってわれわれに對し給う、高き所に在ます神の賜物に他ならない (W. 4967)。

その神に心から感謝を捧げ、同時に、神に對する国家的強情と反逆を告白することを私は今日この日全国民に推めたい。そして、この悲惨な戦争が生んだ未亡人や孤児達、はたまた悲しみに嘆く者達を神がはぐくみ強め給うように、神がその御手をもってこの国家を癒やし給うように、神の摂理にかなう平和と調和と静寂と統一が一刻も早くもたらされるように国民一人一人と共に祈りたい。(W. 497)

この戦争は、究極のところ、敵と味方の間の戦いではない。ましてや、善を代表する北と惡の権化である南との闘争ではない。そうではなく、神の恩寵に對する南北両方の人間の反逆に他ならない。このことは、人間がいかなる反乱を試みようとも決して揺ぐことのない神の恵みを仰ぎ見ることによって初めて理解することができる。そして、神の慈しみの認識こそが、悔い改めに基礎づけられた挫折からの再生という、人間の力だけにより頼む者には測り知ることのできない希望へとわれわれを導くのである。南北戦争三年目に於けるリンカンの信仰理解とはこのようなものであった。十月末に行なわれた長老教会バルティモア教区の代表との会見で、彼はその信仰理解を次のような素朴な言葉に託して表白している。

私は若い頃から全能の神の直接的助けなくして、人間はいかなることもなし遂げることとはできないという確信を抱いて生きてきました。私自身のことを思う時、もっと敬虔な人間であるべきであったという思いにとらわれるのであります。しかしそのような私も、政府が直面しているこの未曾有の困難に際して、万事窮したと思われる時、すべてを神の御旨にまかせようと思うのであります。それは、すべてが神のよみし給うように必ずなる

と信ずるからに他なりません。(M, 535-6)

この頃からリンカンは、彼自身の信仰を、教会の代表者との会見や個人的書簡に限ることなく、公の場で率直に吐露するようになる。政策の問題を語るうちに、それがいつの間にか彼自身の信仰の告白に変わっていくという場面に人々はしばしば出くわすようになるのである。その中でも次のエピソードは、時期は少し後になるが、彼自身の筆になる公文書という形を取っているだけに、新しいリンカンの一つの特徴を如実に示して興味深い。それは周辺諸州の一つであるケンタッキー州議会に宛てて書かれたものである。一八六四年の三月、州議会はわざわざワシントンに代表団を送り、政府の奴隷政策、特に黒人の志願兵をつくる決定に対してリンカンにじきじきに抗議した。リンカンは代表団に口答で政府の立場を説明したが、数日後、その説明を要約した文書を州議会の議長宛てに送っている。その中で彼は、奴隷解放宣言がいかに合憲的であり、黒人の志願兵の起用がいかに軍事的な成功をおさめているかを説明する。そして、その文書を彼自身の信仰の告白で閉じるのである。それは、政治的文書にはそぐわない唐突な印象さえ与えかねないものであった。

直接口答でお伝えしなかったことをこの機会に言わせて頂きたい。事態を支配して来た者は私ではない。そうではなく、事態が私を支配して来たのである。戦いは三年目の終わりを迎えようとしている。しかし国家の状態は、どちらの側も、いかなる人物も、前もって予見し、期待し得たものではない。それをなし得るのは神のみである。もし神が偉大な悪を除去しようと欲し給い、そのためには南と北の両方がこの悪に加担した罪の罰を均等に受けねばならない、と定め給うのであれば、公明正大な歴史は、それが神の正義と慈しみ故に下された正しき審判であることを証しすることであろう。(M, 262)

公の政治文書を己が信仰の告白で締め括るということ、何故リンカンをあえてしたのであろうか。それは、そうしなくては一時たりともこの悲惨極まりない戦争の最高責任者として生き続けていくことができなかったからに他ならない。

リンカンに於ける信仰が占める比重の大きさを知る時、彼のなした多くの演説の中で最も神学的なニュアンスの強い「ゲティスバーグ演説」を、「宗教的神秘性を漂わしたリンカン独特のナシヨナリズム」⁽¹⁾という鑄型から解放することができるのである。

V 「ゲティスバーグ演説」が意味するもの

既に述べたように、「ゲティスバーグの戦い」は、連邦を南部連合に対して最終的に優位な立場に立たせた記憶されるべき激戦であった。ペンシルヴァニアの片田舎でくり広げられたこの戦いで戦死した兵士達を記念して、無名戦士の墓を国費で建設しようという動きが活発になり、その年の一月一九日が納入式の日決定された。リンカンはそこで挨拶をするよう招待を受けたのである。ゲティスバーグでの彼のスピーチは、原稿用紙たった二枚というまことに短いものであった。(ちなみに、彼の前に演壇に立ったハーバード大学総長のエドワード・エヴェレットの演説はなんと二時間に及ぶものであった)。三分足らずの時間では写真の取りようもなかったのか、この歴史的瞬間を記録した写真は一枚も残っていない。「大統領はゆっくりと立ち上がると、ポケットから紙を取り出した。さわめきが静まるのを見計って、鋭い、かん高い声で簡潔で力強い式辞を読んだ⁽²⁾」という新聞記事からその場の様子を想像する他ないのである。ここに彼の演説の全文を掲げる。

八七年前、われわれの父祖たちは、自由の精神にはぐくまれ、すべての人は平等に造られているという命題に捧げられた新しい国家を、この大陸に生み出した。

現在われわれは、一大国内戦争の最中にあり、この国家が、又このような精神に於て生み出され、このように捧げられた国家が、長く続き得るかどうかの試練を受けている。われわれはその戦争の一大激戦地に集まり会した。われわれは、この国家が生き永らえるようにと、ここでその生命を投げ出した人々の最後の安息の場として、この戦場の一部を捧げるためにとって来たのである。これはまことに適切かつ適当なことである。

しかし、さらに大きな意味に於ては、われわれはこの地を捧げることはできない——清めることはできない——聖別することはできない。生き残った者と死せる者とを問わず、こゝで戦った勇敢な人々こそ、すでにこの地を清め献げたのであり、われわれの微力をもって増すことも減らすこともできないのである。われわれがここで述べることは、世界はさして注意を払わぬであらう。また永く記憶することもないのであらう。しかし、かれらがこゝでなしたことは決して忘れ去られることはないのである。こゝで戦った人々がこれまであのように立派に進めてきた未完の事業に、こゝで身を捧げるべきはむしろ生きているわれわれである。われわれこそ、残された大いなる事業にこゝで身を捧げるべきである。その事業とは、これらの名譽ある戦死者が、最後の力を尽くして身命を捧げた目的に対して、彼等の志を受け継いで、さらに一層身を捧げることである。これらの戦死者の死をむだに終わらしめないことを、こゝで堅く決意することである。この国に、神の下で、新たな自由を生み出すことである。そして、人民の、人民による、人民のための政治が、この地上から滅びることがないようにすることである。(四、23)

まず、この演説の文体であるが、リンカンの莊嚴でリズムカルな文章は、英語の聖書の文語訳 *The King James' Version* を思い出させる。例えば、文頭の *"Four score and seven years ago,"* (八七年前) は、詩篇の *"The days of our years are three score years and ten."* (「われらが年を経る日は七十歳にすぎず (九〇・一〇)」) を連想させるし、又「われわれの父祖たちは……新しい国家を、この大陸に生み出した」の「生み出した」(*"brought forth"*) は、神がモーセに語りかけた「汝、民をエジプトより導き出したる時……」(『出エジプト記』三・一二)「*"when thou hast brought forth the people out of Egypt……"*」や、身重のマリヤの夫ヨセフへの天使の言葉「彼は子を生まん」(『マタイによる福音書』一・二三)「*"She shall bring forth a son……"*」に見られるように、新しいものが生み出される時の期待と喜びを象徴する言葉である。このあふれんばかりの期待感とは、演説の終わりの部分、「この国に、神の下で、新たな自由を生み出す……」(*"……this nation, under God, shall have a new birth of freedom……"*) に託されてクライマックスに達する。リンカンが聖書を「ゲティスバーグ演説」の下敷にしたことに疑問の余地はない。

聖書の影響は、しかし、語彙や文体の領域に留まらない。それ以上に、その内容に大きく影響しているのである。演説の中核を占めるもの——それは、あくまでも国家の崩壊という危機に直面した人々に、それをかいくぐることを通してもたらされる新生への希望である。つまり、リンカンは、罪ある者がその罪を告白し、悔い改めることによって赦しを受けるというキリスト教の福音を、奴隷制からの訣別という国家的スケールにあてはめた、と見ることでできよう。人は罪の告白を通して新生へと昇華されるように、アメリカ合衆国は、奴隷解放という「未完の事業に身を捧げ」ることによって、初めて真に自由で平等な国家たることができるのだ、とリンカンは言うのである。このような解釈に立った時、リンカンの「命題」(*proposition*) という言葉が持つ独特のニュアンスも正確に把握することができるのではなからうか。即ち、彼にとって「すべての人は平等に造られている」という命題は、ト

「マス・ジェファソンがものした「アメリカ合衆国独立宣言草案」(一七七六年)の「証明を必要としない自明の真理」("a self-evident truth")とはや同義ではない。それは、南北戦争という試練("testing")を通して初めて本当に知ることのできた命題である。換言すれば、理神論(Deism)に於けるような静的なものではなく、現実との取り組みの中でたえず確かめられ、新しく把握し直されなければならない動的な性格のものである。「望んでいる事がらを確信し、まだ見ていない事実を確認する」(「ヘブル人への手紙」一一・一二)」という信仰を通してしか見ることのできない真理であると言えるであらう。

確かに「ゲティスバーグの演説」は、結果的にはアメリカの理想と使命を最も感動的な言葉で表現したものであったし、それがアメリカの全歴史に崇高な意味を与えたという評価も決して間違ではない。しかし、それは当時のリンカンが意図的になそうとしたことではなかったのである。われわれは「ゲティスバーグ演説」が三年近い年月の中でなされた彼の血の出るような祈りと深い神学的思索の結晶であったことをここで指摘しておきたいと思う。ゲティスバーグに於いて、リンカンはあくまでも彼個人の信仰理解を国民に向って公に告白したのであって、決して国威を高揚したり、国民の戦勝への情熱を鼓吹しようとしたのではなかったのである。

VI 「南部再建案」の提案

この信仰の人リンカンも、政治的には穩健そのものであった。彼はその頃一人の友人に宛てた私信の中で、「後退することのないようにしっかりと立ちながら、早く走りすぎて国家の使命を破壊しないようにしたいと思う(We want to)と書いている。しかし、その穩健さが、ある人々には優柔不断に見え、ある人々には過激に映ったのである。このことは、戦争終結のめどがなんとかたつようになった六三年の末に發布された「大赦並びに南部再建に関する

布告」(Proclamation)とそれに対する議会の反応に明らかである。

リンカンはその中で、テネシー州が解放され、アーカンソー、ルイジアナ、フロリダ、ヴァージニアの各州も部分的にはあるが連邦の手中に収められたことをかんがみる時、政府は南部再建の問題と真剣に取り組まねばならなくなった、と言う。その具体案として、彼は次の二点を提案した。第一は、南部連合の外交官、並びに将校以上の軍人、その他少数の者を除いた南の人々に、合衆国憲法支持の誓約を条件に特赦を与えようというものである。第二は、この誓約を行なった者が六〇年選挙当時の投票者の一〇パーセントに達し、奴隷制度を廃止した新政府を樹立した場合、その州が連邦に加わることを承認する、というものである。これがいわゆるリンカンの「テンパーセント・プラン」であった。

このリンカンが示した再建案は、彼がいかに南に対して寛大であり、憎悪や復讐心から自由であったかということとを証しするものではあった。しかし、多くの人々は、これでは何のために三年間も莫大な犠牲を払って来たのか、わからないではないか、と言ってリンカンを批判した。南はあくまでも合衆国に対して反乱を起こしたのであり、その罪は重く、嚴重な処罰を受けるべきである、と言うのである。リンカンの南部再建案に対する批判は、しかし、これだけに止まらなかった。彼が提示したプランの下に新政府が樹立された場合、黒人の立場は一体どうなるのか。南北戦争勃発以前と実質的にまったく変わるところのない悲惨な状態に戻されてしまうではないか、というのがリベラル派から寄せられた批判であった。奴隷制は完全に撤廃されねばならない。そのためには黒人を完全に自由にするのである。具体的には、リンカンの親友でリベラル派の上院議員チャールス・サムナーが主張したように、黒人に市民権のみならず投票権をも与えるべきである、というのである。それに対して、保守派は保守派で、リベラル派の提案は、南のみならずアメリカ全土を混乱に陥し入れ、ひいては、人種混合を結果することになると猛烈に反対した。

保守派と革新派の論争が新たにむし返されつつあった最中でリンカンの立場はいかなるものであったのであるか。勿論、南の奴隸制を黙認することは絶対できないことであつた。奴隸制はあくまでも撤廃されねばならない。ちなみに、彼は秘書のヘイに言っている。「奴隸制を黙認して、黒人を放棄することは、やつと勝ち取つた立場を放棄することになるし、それは又、彼等に対する惨酷で驚くべき裏切りだ。」¹³当面の問題は彼等に投票権を与えるかどうかであつた。しかし、リンカンの見るところそこまで決断するはいくつかの困難が立ちはだかつていた。一つは、奴隸のほとんどが文盲であるという事実であつた。自分の名前も書けない人間に一票を投ずることが果たして可能であらうか。もう一つは、彼等がその長い奴隸生活を通じて、自己選択の能力を失っているということであつた。彼等が投票権を彼等の利益になるように生産的に行使できるかどうかについて、リンカンは不安を持っていた。しかし、それ以上に困難な問題は、力關係に於いて黒人をはるかに上回る白人達を、黒人にも投票権を分かち与えるよう説得できるかどうかであつた。リンカンは、その數ヶ月前に、東部の都會を襲つた暴徒の群れを忘れることができなかったに違ひない。それは、白人社会に潜む根強い黒人差別主義の最もディモニックな現れではなかつたか。奴隸を平等な人間として受け入れることに我慢ならない白人が、黒人に政治的決定権をも与えようとする政策にどのような反応を示すであらうか。今ここで投票権を主張することが、かえつて南の戦意を高揚させ、北の人々のリンカンに対する反発と不信を深めるであらうことは、火を見るよりも明らかであつた。しかし、戦争終結のメドが何とか見えて来たこの時期に、南の再建の問題を放置しておくことはできない。このようなディレンマに立つたリンカンは、結局、黒人の投票権を主張することは實際的ではないという結論に達した。そして、チャル・サムナーの期待にもかかわらず、それに関する論争には、一切関わろうとはしなかつたのである。¹⁴

幸いなことに「布告」に対する連邦議會の反応は大むね良好であつた。革新派の旗頭の一人であつたオーエン・ラヴジョイさえ、やつと奴隸制に終止符を打つ歴史的瞬間を目のあたりにすることができると、涙を流さんばかり

に喜んだという。¹⁵

Ⅷ 二つの心配

連邦議会による南部再建案の承認という一応の成功にもかかわらず、リンカンには依然として心配が絶えなかった。その一つは義妹エミリーに関してであり、もう一つは、迫り来る大統領選挙をどうするかという問題であった。一二月のある日、妻メアリーの妹が幼い子供をつれて、はるばるジョージア州からホワイト・ハウスにやって来た。南部連合の将校であった夫のペンをアトランタの戦いで失ったエミリーは、リンカンとメアリーを頼ってひっそりと越境し、命からがらワシントンにたどりついたのであった。ちなみに、南北戦争勃発直後、リンカンは、南部連合のために戦うと言い張るベンに連邦に残るようにと懸命に説得して、失敗している。この若き未亡人にリンカンは心から同情を寄せ、ホワイト・ハウスに家族の一員として留まるように推めたのである。エミリーの日記によると、その時リンカンは、彼女を抱きかかえるようにして部屋に迎え入れながら、ペンの命を奪った連邦軍の最高司令官としての自分を恨まないでほしいと言った。いいえ、あなたはあなたの良心に従って行動しているのであって、私は決して恨みには思っていない。すべては、戦争のなせる業なのですから、と言うエミリーの言葉に、リンカンは涙を流した、と彼女は記している。¹⁶

彼女のホワイト・ハウスに於ける存在は、さまざまな臆測や流言飛語を生むものとなった。特にリンカンを苦しめたのは、エミリーが南のスパイであり、リンカン夫人もその片棒をかついでいるという噂であった。ただでさえ精神的に不安定であったメアリー・トッドは、このために一層神経過敏になり、その姿は妹エミリーの目から見ても尋常ではなかった。エミリーは、それを物語る次のようなエピソードを日記に残している。

「エミリー、ウィリーは生きているよ。」とメアリーは言った。「あの子は毎晩ベッドの側に来て、あの優しい笑顔で私に笑いかけるの。時々エディ（二男。一八五〇年に四歳で死亡。鈴木〓注）も一緒に連れて来るのよ。」私はゾツとした。彼女は異常としか思えない。彼女を見てみると私は恐ろしくなる。あんなに神経質で興奮しやすい人があのメアリー姉さんだとはどうしても思えない。彼女はいつもひどく苛立っており、その笑顔はわざとらしい。¹⁹

その年のクリスマスの直後、エミリーはリンカン夫妻が引き止めるのを振り切るようにホワイト・ハウスを去っている。おもてむきの理由は、ケンタッキーに残した母親や親類と一緒にくらしたいということであった。²⁰しかし、本当のところ、彼女にとってホワイト・ハウスでの生活は、耐えがたい重荷となっていたのではなからうか。大統領が官邸にスパイをかくまっているという噂は彼女の耳にも入っていたし、疲労困ぱいした姉の姿は、彼女にとって見るにしのびないものがあったと思われるからである。エミリーの滞在は、一ヶ月足らずの短い期間のことではあった。しかし、われわれは、このような小さなエピソードからも、リンカンの人間的な優しさを十分汲み取ることができる。南軍の将校の妻をホワイト・ハウスに住ませるということが、ただでさえ批判や反発や攻撃的となっていた大統領の立場を、より一層困難なものにするであろうことは、火を見るより明らかであった。親戚にスパイがいるという噂が、二期目の大統領選挙を勝ち取ろうという彼の希望を粉々に打ち砕くかもしれないということとを、彼が考えなかった筈はない。にもかかわらず、リンカンはエミリーを快く迎え入れ、できるだけ長く滞在するようにと推めているのである。²¹

リンカンの心配の種はエミリーだけではなかった。迫り来る大統領選をいかに戦うかが大きな問題として彼の前に立ちはだかっていたのである。長びく戦争は、北の経済を衰退させ、庶民の生活を圧迫した。六三年の初夏から

その年の終わりにかけての六ヶ月というものは、リンカンの評判が最も低下した時である⁽²⁰⁾。それを証明するものに、アメリカが生んだ文豪メルヴィルに大きな影響を与えたリチャード・デナが、英国大使に任命されたチャールス・フランシス・アダムスに宛てて書いた手紙がある。

ワシントンの政界について最も驚くべき現象は、大統領に対する個人的忠誠の欠如だと思ふ。どちらを向いても、それはない。讃美者もいなければ、熱心な支持者もない。

デナ自身リンカンに対して失望と不信感しか持っていなかったことは、彼がその手紙の中で、大統領はある種の賢明さと常識を持った誠実な男ではあるが、しよせん大統領の器ではなく、「この男にいまの椅子におられるということは、われわれから見たら言うべからざる大災害なのだ。」⁽²¹⁾と云っていることから明らかである。

南北戦争の長期化に反対して戦争の即時終結を求める市民と、この戦いを勝利に導くために税金の徴集や徴兵をより徹底的に行なうべきであるとする過激派にはさまれて、共和党は次第に混乱の度を強めていった。大統領候補に再指名されるという可能性が次第に薄れていく中で、リンカンは彼にとっていまますべき課題は何か、ということと真剣に模索したと思われる。彼の結論は、南部再建案の青写真を完成させることであり、合衆国憲法を改正して戦争終結後に於ける奴隷制再生の可能性を根こそぎにすることであった。彼は残り少なくなった大統領就任期間中にこれらの問題に全力を投入しようという決意を固めたのである。一八六三年は終わり、新しい年が明けようとしていた。南北戦争勃発から数えて三年目のことであった。

注

- (1) カール・サンドバーグ『エブラハム・リンカン』Ⅱ、二四九頁。
- (2) Oates, p. 386.
- (3) Tarbell, p. 126.
- (4) サンドバーグ、二七一頁。
- (5) Oates, p. 367.
- (6) サンドバーグ、二八八頁。
- (7) Tarbell, p. 277.
- (8) Oates, p. 382.
- (9) *ibid.*, p. 387.
- (10) サンドバーグ、二七一頁。
- (11) 井出義光『リンカーン』清水書院、昭和四九年、一八一頁。
- (12) サンドバーグ、四〇五頁。
- (13) Hay, *Diaries*, p. 138.
- (14) リンカーンは、心情的には革新派の立場に同情的であった。彼は秘書のヘイに次のように言っている。「二者択一を迫られたとしたら、私はちゅうちょせずに未来により大きい希望を託せる方を選ぶ。それは革新派の立場だ。」*Ibid.*, p. 135.
- (15) Oates, p. 402.
- (16) *ibid.*, p. 407.
- (17) *ibid.*, p. 408.
- (18) *ibid.*, p. 409.
- (19) *ibid.*, p. 408.
- (20) サンドバーグ、三〇九頁。
- (21) 同、三〇頁—三二頁。
- (22) 同、三一頁。

